

大学入学後の教育水準の維持方策

大学入試センター 小野 博

1. はじめに

大学生の基礎学力の低下が指摘される中、日本の大学関係者には海外の大学入学後の教育水準の維持方策に関心が集まっている。

英国は難易度の高い資格試験（Aレベル）により教育水準の維持を図っているが、米国の大学は入学後のリメディアル教育やプロベーション制度の運用で教育水準の維持に努めていると言われている。日本でも最近、中教審などで将来の大学像として「入りやすく、出にくい大学」を目指すことが論議されているが、従来は大学入試の厳しい競争によって教育水準が保たれてきたと言っても過言ではない。そこで、本報告では主として米国の大学入学後の学生の学力の評価及びその後の措置について述べる。高校教育が崩壊していると言われているアメリカの大学で、入学が比較的楽な割に大学の教育水準や権威が保たれているのは、入学後のプレースメントテストに基づいたリメディアル教育の実施や入学後の成績不良者に対する落第、退学に関する制度が Probation System として実施されていることが役立っている。また、特別優秀な学生には Honors Program（オナーズプログラム）と呼ばれる制度が用意され学生の学習意欲を刺激している。

2. プレースメントテストとリメディアル教育について

(1) プレースメントテスト

入学者選抜方法がオープンアドミッションで形式が整えば全員入学可能な Community College のような公立大学の入学者には基礎学力が低い学生も多い。そこで、基礎学力で

ある英語と数学の知識を測定するプレースメントテストを導入し、その成績によってはノンクレジット（高校レベルの基礎的な内容であるため大学の単位にはならない）の特別コースの受講が義務づけられている。特別コースの英語の内容は Reading, Writing が主体である。このように、Community Colleges が高校教育の補完の役割をはたしていることがわかる。

(2) プレースメントテストの実際例

ハワイ大学の Community College の1つである KCC の場合を代表例として述べる。KCC は ACT の COMPASS と呼ばれるコンピュータを用いた適応型テストシステムを導入し、英語と数学のプレースメントテストを実施している。4年制のマノア本校への編入希望者にテストの受験を義務づけているが、生涯教育やノンクレジットの講義を受けるだけの学生はテストを受けなくてもよいことになっている。また、プレースメントテストの結果があるレベルを超えないと受講できないコースもある。

97年度には入学前の学生を含め、5ヶ月で約2700人にテストを実施した。テストの判定基準は、大学の授業開始レベルである English 100, Mathematics 100 に達しているかどうかであり、達していない学生にはリメディアル教育を義務づけている。プレースメントテストを受けた学生のうち、英語で45%の学生が、数学では55%の学生が不合格になっている。

プレースメントテストが不合格でリメディアル教育を受けている学生も専門の単位を取ることにはできるが、言語と関係するような歴

史の授業等は、英語のプレースメントテストで合格しなかった学生は受けることができないので、事実上、受講単位が減らされたことになる。

リメディアル教育はノンクレジットであるが、有料であり、大学の正規のコース（1単位49\$）より多少安い。英語の場合、1学期8単位で320\$、数学は1学期6単位で224\$である。リメディアル教育を行なう教員は原則的に大学の教官である。

大学入学後2～3年間、リメディアル教育だけしか受講できない学生や、その途中で自主退学する学生もいる。また、英語がネイティブでない学生、例えば留学生やその世代で移民してきた学生には学内で作成されたペーパーによる別のテストが実施される。

また、4年制の州立大学である、ハワイ大学マノア校ではリメディアル教育は行っていないが、入学者全員に入学後に学内で作成したペーパーテストによる英語のプレースメントテストを受けさせている。その内容はコンポジションやエッセイが主体である。さらに、工学部及び理学部などの理系やビジネスコースの学科の学生には、科学のテストも課している。

これらのテストの結果、英語（学部によっては科学も）がレベル100に満たない学生は入学が取り消され、Community Colleges（C.C.）での学習を勧められており、1997年9月期の入学学生約1550人のうち、約30人がこの対象となった。

他の州立大学の事情をマサチューセッツ州の州立大学の1つであるUMASS BOSTON校の場合で説明する。UMASS BOSTON校では、入学者全員がオリエンテーションの後、学内の教員が作成したペーパーテストによる英語と数学のプレースメントテストを受ける。このテストはスタンダードアセスメントテストと呼ばれ、英語はreading及びwriting問題であり、州内の4年制州立大学は共通問題

である。また、キャンパス内にTesting Centerがあり、プレースメントテストを一度落ちても、ここで再テストを受けることができる。

プレースメントテストの結果、大学の学業であるレベル100に満たない学生が受講する英語及び数学のノンクレジットのリメディアル教育が4クラスある。学費は、3単位分で州内学生は79.5\$、州外学生は372\$である。

97年度入学許可者1453名中、登録者は約700名であったが、そのうち169名がリメディアル教育を履修し、さらにその内、117名はフレッシュマンであり、残り（52名）は社会人であった。

私立の競争選抜型の4年制大学の場合をボストン市にあるBOSTON UNIVERSITYを例に説明する。

BUは基本的にはリメディアル教育を行っていないが、入学条件としているSATの総得点が高得点であっても、アジア系の移民を中心に英語のwritingの実力が十分でない学生がおり、TOEFL 500点以下の学生を対象にインテンシブの英語コースをノンクレジットで用意している。この英語コースの主たる目標はTOEFLの得点を上げることである。担当教官は特別教官（スペシャルファカルティ）と呼ばれ、大学教官ではないが英語教育の専門の教員である。このコースに在籍する学生は基本的には通常のコースを取ることはできないが、TOEFL 520点以上の学生は英語のインテンシブコースに加え、取れる範囲の通常のコースを取ることができる。

また、大学には入学前の英語学習を目的とするシロップと呼ばれるコースもあり、このコースの修了後、TOEFL 500点以下の学生でも、コース内のテスト結果によって大学への入学が許される場合がある。

3. 成績の算出方法とプロベーション

アメリカの大学で実施されているGPAす

なわち成績の算出方法や成績による放校制度としての Probation 制度に関心が集まっている。そこで A.O. 訪問の際に大学入学後の教育水準の維持方策についても質問し、また大学入学後に学生に配布する履修案内書入手し、関連した項目について調査を行った。

ここでは州立の 4 年制大学である UMASS-Boston を代表例に成績の算出方法と Probation 制度の運用について入学後配布される履修案内書により説明する。

(1) 成績の算出方法 (Grading)

当大学では A, B, C, … のアルファベットを成績評価に使用しているが、それぞれの評価は下記の如くに点数に換算することができる。

アルファベット評価	対応点数
A	4.00
A-	3.75
B+	3.25
B	3.00
B-	2.75
C+	2.25
C	2.00
C-	1.75
D+	1.25
D	1.00
D- (合格最低線)	0.75
F (不合格)	0.00

I n c (未完了)

P 合格, (合否ベース選択による——下記参照)

Y 通年コースの暫定評価

W 脱退

NA 不参加

点数に科目の単位数を掛け合わせて科目ごとの評価点を出し、全科目の評価点を合計し、各学生の累積評価点を出す。累積評価点を累積単位数で割り累積平均点を出す。

① The Pass/Fail Option

大学卒業資格 (学士号) 取得に向け勉強していく中で、各学期につき 1 科目に限り、また最大限 8 科目までに限って、合否ベースで科目を採ることができる。(もともと合否ベース科目と決められている科目はこの中に含まない) 合否ベース科目の場合、満足な結果をもって履修されれば“P”という評価が与えられ、卒業のための単位には数えるが、累積平均点の中には数えない。評価“F”は不合格である。合否ベースで科目を採るには、選択調整期間が終わった後、公表された合否ベースの締切り期日までの間にタッチトーン登録システムに連絡しなければならない。指示と締め切りについては、学期ごとに学籍簿係で手に入れることができるコース合否及びコース脱退ワークシートに出ている。以下の点に留意すること：

- a : 合否ベース選択は公表合否締切り以後はキャンセル不可能である。
- b : 合否選択をする前に、学生は合否コースに関して、大学名、専攻、学部、必要専門プログラムについて注意深くチェックすること。
- c : もし学生が合否ベースで採りたいと思った科目が継続教育部門によって提供されている科目だったら、継続教育部門に連絡すること。

② The Not-Attending (NA) Grade

不出席 (NA) 評価とは、学生がコースに登録し名簿にも名前があるにも拘わらず、クラスには全く出席しなかった場合である。NA 評価は、学籍簿に NA として記録され、そのコースに対する授業料を支払う責任があるが、コースを落とすこととは異なる。NA 評価を取っても、その学生の累積評価点には影響しないし、ファイナンシャルエイドにも影響しない。

③ The Incomplete (Inc) Grade

Incomplete (未完了) の評価を受けた学生は、そのコースを完了するために1年間の猶予が与えられる。新しい評価を受けた場合は、その学期の評価締切りまで(例えば、秋学期の未完了科目については次の秋学期の終わりまで。春学期の未完了科目については次の春学期の終わりまで)に学籍課に提出すること。この猶予期間締切りまでに完了しなかった科目はすべて、落第“F”となり、それ以降はそのコースを完了することは認められない。

④ Failed Courses

卒業資格に必要な科目を落第した場合は、もう一度採らなければならない。もう一度採って合格した場合は、初めの落第は累積平均点に入らないが、学籍簿には記録が残る。

⑤ Repeated Courses

同じ系列上にある、それより上のレベルの科目を採ったことがない、あるいは採っても合格したことがない科目については、繰り返し採ることができる。取った評価に関係なく、同じコースを繰り返し採ることができる。成績表には両方の評価がつくが、累積平均点には2度目の評価だけが入れられる。Umass-Bostonの学部の学生は、一度に1科目、全部で4科目まで、繰り返すことができる。

(2) プロベーション制度

次に成績による放校制度である Probation 制度とその手順について説明する。

オープンアドミッションの Community College のように学力の低い学生でも受け入れる2年制大学ばかりか4年制の大学でも入学はしたものの、成績が悪く単位がとれないと Probation と言う監視(猶予)期間がおかれる。そして、次の学期に予め提示されている成績が取れないと容赦なく自動的に退学になる制度である。ある意味ではこの制度によ

って大学生の学力水準が保たれている。日本の大学でもその導入が期待される制度であるが、このような制度を社会が受け入れている前提として、単位が取れなかったことが不名誉ではなく単に勉強ができなかっただけで、再度 Community College で勉強し直して良い成績を納めれば編入制度によって4年制の大学へ編入するチャンスが残されていることを保証されている点も特徴的である。この編入制度は高校卒業後、数年以上社会経験を積んだ社会人の学生の高等教育への復帰を促進、保証しており、学習意欲の高い学生には非常に親切な制度だと感じた。このように一定レベルの成績が保持できない等、本人の責任により Probation になったり、比較的自由に編入が認められているのがアメリカの高等教育制度の特徴である。

再び、UMASS-Boston の履修案内書を見てみよう。

① Probation

最低限必要な累積平均に達しなかった最初の学期の終わりに、その学生は仮及第(probation)となる。成績表と一緒に、仮及第の身分であること、そして次の学期に取る科目についてアドバイザーに相談することを強く勧めた手紙が送られる。仮及第期間中、学生は、学生組織の中で如何なる活動をすることも許されないし、キャンパスの内外において当大学を代表することは出来ないし、如何なる大学間の運動競技チームにも参加することは許されない。

② Suspension

2学期目の必要最低限累積平均点を取れなかった学生は1学期間停学となる。1学期の後、然るべき機関を通じて再入学を申請できる。この際、学生のスケジュールに条件が付くこともあるし、また保持しなければならぬ一定基準が課せられることもある。停学直

前の学期の平均点が最低限2.0以上だった学生は仮及第期間をもう1学期延ばしてもらおう、求めることができる。この場合、許可されても条件付きとなる場合もある。そして、この条件に従わなかった場合は自動的に停学となる。

③ Dismissal

停学後再入学を許可された学生で、再入学の際、定められた一定の基準を保持できなかった学生は放校処分 (dismissal) となる。放校処分となった学生は1年後再入学を求めることができる。

停学または放校処分となった学生は、学位を持たない学生としては入学できないし、また、継続した教育は受けられないし、サマーセッションも取れない。

学期の初めまでに停学または放校処分の知らせを受け取らなかった学生は、取り敢えずその学期は最後まで終わらせることができる。注意：これらの最低限保持しなければならない基準については、より厳しい大学のプログラム、または学校の方針に従うこともある。累積点数が一覧表に載っていない科目についてはこの限りではない。

(3) Probation 制度の実際例

まず、KCCのプロベーション制度について学生用のカタログで公表されている内容を基に示す。全学生数約7000人に対し、98年春学期にプロベーションが通告された学生は879人、そのうち1学期間は戻れないサスペンションは201人であった。また、2学期続けてGPAが2.0に達せず放校 (dismiss) になった学生は81人であった。

プロベーションが宣言された学業困難な学生には、専門のカウンセラーより単位の取り方 (単位マネジメント) や学習方法に関するカウンセリングを受けることになっており、12~15名のカウンセラーが担当している。ま

た、カウンセラーには学業以外の問題についても相談を受け入れることになっている。

4. オナーズプログラム (Honors Program) について

特別に成績が優秀な学生にはオナーズプログラム (Honors Program) と呼ばれる制度を用意して入学を勧誘している。この認定を受けた学生は優先的に受講するコースの選択ができたり (コースの受講は通常申し込み順であり、コース編成が小人数であるため、人気のあるコースはすぐ一杯になる)、この認定を受けた学生だけが受講できるコース (Honors Courses) を用意することにより、学力の高い学生の確保に努力している大学が多い。

ハワイ大学マノア校の場合、高校の成績 (GPA) が3.5以上の学生に与えられる。図書館の一室をオナーズプログラムの学生用ラウンジとしても与えられる他、履歴書に書けるので就職に有利である。

UMASS Boston のオナーズになる基準は高校成績のGPAが3.5以上、SATが1150点以上 (1440点の学生もいる)、ACTが25点以上の学生に与えている。オナーズのための特別コースを用意したり、スカラシップを与える。また、教授と共同研究の機会が得られることが多く、論文発表の機会もある。また、就職の際にも有利である。

オナーズが与えられている学生は現在約100人いる。8人の学部学生の投稿した論文が学会誌に掲載された。そのうちの一人は教育学部の学生であるが、彼は高校を卒業しておらず、GED (大検のようなもの) 取得で大学へ入学した学生である。

BUではSAT 1400点以上の学生をオナーズとして登録しており、現在約200人の学生がいる。

5. 編入について

編入には色々な方法が用意されている。U H, U C S D, U M A S S などの州立大学では4年制の大学と Community Colleges が協定を結び、編入の制度を明文化している。Community Colleges の成績（編入する学科により異なる場合が多い）を編入の目安とすることにより、協定を結んだ2年制の Community College から4年制の大学への自動的な編入を可能にするなど、学習意欲のある学生には多くのチャンスが与えられており、非常に有効なシステムだと言える。この場合、高校での成績やSAT/ACTの成績が悪い場合も想定し、高校卒業後相当の時間が経過しているので、大学での成績だけで3年への編入を認めている。

その一方で、私立大学の場合、定員に対する空きが少ないので、College Record, High-school Record, SAT/ACTの成績等の提出を求める大学(MIT)もあり、ここでは、約300~400人の応募者の中から20~40人だけが編入が許可される。BUの場合、特定の2年制の大学と編入協定を結び、編入制度はあるが、外部からの編入生が少ないため十分に機能していない。年により多少異なるが、約3800名程度の編入志願者に対し、入学許可がおりるのは200~300名である。また、編入志願者には今まで在籍したcollegeでの成績の平均が3.5以上を求められており、志願票にはSATのスコアやエッセイなどの記載や推薦状が必要であるが面接は行っていない。また、海外からも編入生(カナダ, アジア, ヨーロッパなど)を受け入れており、この際、A.O.を通じて各学科と相談することとしている。世界の経済状況の影響で、最近カナダからの編入生が多く、アジアからの編入生は減っている。BUの授業料は私立であるため留学生も同額であるが、外国人はアメリカ人を対象とした奨学金などの経済的支援は受

けられない。

編入志願者, 合格者, 入学者数を示す。

	編入志願者数	合格者数	入学者数
UMASS-Boston	2,999	2,576	2,224
SUNY Brockport	2,602	1,843	1,025
UCSD	4,395	2,534	1,030

参考文献

1. 荒井 克弘 「戦後日本の大学入試」『国立大学入学者選抜協議会セミナー資料入試研究の基礎知識』42-54 1997
2. 小野 博 「アメリカの大学入学者選抜制度」『米国の大学経営戦略』学校文化センター 87-122, 1998
3. 小野 博 「ユニバーサル期の高校・大学の教育接続—大学入学の構造転換とAO型入試—」『AO型入学選考の運営と実際』地域科学研究会 31-45, 1999